詩文學研究

第六輯

1940

京東

詩文學研究會

詩文學研究

第六輯

1940

詩文學研究　第六輯

一九四〇年夏期版

エッセイ

現代詩の苦悶……梶浦正之……六
詩作と經驗……T・S・エリオット……一一

詩作

峽舟……葛井和雄……一五
二月の祈り……桑門つた子……一六
樹齢の血枝に春火を點ず……岡田武雄……一七
海の歌劇……小林節子……一八
L'ESPOIR……木下夕爾……二〇
南風抄……羽子田時世……二一
かなしい風景……奈良進……二三
街路樹の歌……小松茂彦……二三
夜への手記……水島秋夫……二四
沙漠……清水達……二六
はげしきをとめたち……西山五百枝……二七
波止場……岩谷健司……二七
投影ヨリ拔ケテ……木村茂雄……二八
傳說……鹽谷安郎……三〇
祕そやかな饗宴……國廣勝太郎……三一
夕……小山恒兒……三三
廢園……小池亮夫……三四
足袋……堀口太平……三五
野立……小林正純……三七
窓枠に寄る夏……梶浦正之……三八
朝……松村一美……三九
工場手帖……長谷雄京二……四〇
胸甲類……寺元亮子……四一
海の祝宴……辻井健彥……四二
盲日の沼……山路青佳……四三
型なきアトリエ……上松ちか子……四四
郷影……後藤敏夫……四五
書簡……藤浪里子……四七
短章……森下紀男……四八
掌……國分尙治……四九
干乾びた海……丹羽哲夫……五一
看護……竹内はじめ……五二

批評・研究

詩壇主流の動向……小林正純……四
ブック・レビュウ……楓月庵主……五六

詩作

ゆびの信號……大橋正種……五八
抄……嶺皖彦……五八
朝……津川民子……五九
PEACE FRONT……竹岡範緒……六〇
朝はあをい馬のたてがみだ……脚雄……六一
貝殻に囁く……梅澤恒夫……六二
或る生命……稲垣美子……六三
春……佐藤菁雅……六三
郷愁……松下眞木子……六四
その日の視野……朝井美智正……六五
ある午後の散策……西本輝子……六六
三色菫……上田康……六六
わたしは何もない……豊田春江……六七
梅圖……明智康……六八
少女と夕景……中村大助……六九
生活……美川悧……七〇
逝く青春……宮川蜻兒……七〇
病床記……山口眞佐子……七一
春雨……桂美津夫……七一
桃色の霧……安部英雄……七二
高原の歌……安井正三……七三
友情の炎……福島源次郎……七三

批評・ノート

第五輯の反響……七五
作品再検討……七六

試作

……七八

加藤俊吉　加藤沙だ子　伊藤聖子　田中律　小松信彦　兒玉弘子
不二柳子　鈴置勝利　岡田篤世　榊原鈔

編輯後記……八三

現代詩の苦悶

――アフオリスム的時評――

梶浦正之

作意と形式

書かれた作品に作者の企圖した作意が仄かに見えることは必ずしも非難すべきではない。勿論、一つのヂエネラツションを遂行した完全作品には作意などといふキザな分子を認識することは不可能であらう。しかし、進展や發見や革新を歩み出す詩人の作品には絶へず何らかの作意が覗へるに相違ない。

世のすべての先驅者に之の非難は向けられるであらう。そして亞流と稱ばれるすべての詩作者が之を完成品にまで仕上げるであらう。この意味に於て先驅者と亞流とはいづれもその役割の輕重を問ふべきではない。

熟練職工が自ら發明した機械の操作をマスタアした刻の危險と倦怠とを見よ。

自ら創造した形式が竟に自らを束縛する。この哀れな自縄自縛に身動もならぬ詩人が氾濫してゐる淀んだクリークが詩界の主都だつたら鼻もちがならぬ。

個性の革命と角度の轉換

藝術の進展は個性や人格の消滅だなどと突飛なことをT・S・エリオツトは謂ふ。これは屢々アイロニイとして多くの

若い人々に誤解されたので、僕は既に「個性の革命」といふ言葉に換へて見た。

うつかり個性は信用が出來ない。

個性は時として惡癖に變化する。

それは作品創造の瞬間に於ては神聖に近いエネルギイの浸透性を有するのであるが、作者が、時代の潮流や自己進展を忘却して長い間、この御得意の要領を自惚れてゐると竟には出船の煙のやうな味氣ない惡癖と變るのだから御用心。

そこで之の危險と倦怠とを救助するのは角度の變化だ。臆病な詩人や詩壇的地位といふやうなゲテモノを角度と混同してゐる詩人などには、とても角度は變へられぬ。これに要する勇氣は蛇が脫皮するよりも容易ではない。

立體的な風景に見慣れた人間が飛行機上から平面的な風景に接した刻、諸君の頭腦にいち早くやつて來るものは何であるか？嬰兒が雷鳴を最初に耳にしたやうな驚異か。それとも小學校で見慣れた地圖やパノラマなのか。

角度を變へた刻、感覺の鋭敏のみを誇つてゐる詩人は幻惑してフラフラするだらう。純情盲信の詩人は驚異の鏡を覗くだけだらう。更に知性的に賢明な詩人は經驗に關聯性を求めて稍々安心する位が落ちなのである。

いづれも、この新しい對象を詩化する迄には相當の時間を必要とする。之の對象をいち早く詩化することは、世にジャンルの多樣性と稱ばれる之ら各詩人の各要素を多少なりとも自己の裡に握手させる容量を抱く詩人にのみ可能なのだ。榮螺のやうに頑丈な扉を閉ぢて藝術のジャンルの多樣性の意義を見聞しない偏狹な詩心を改めよ。

音律的要素

現代詩には最早純粹な音樂的意味に於けるリズムは皆無であると謂つてよい。それはプロソデイが詩の重要な構成分子となつてゐた時代が過ぎたからである。即ち言葉に於ける具象と具象の意味との全價値が、之のプロソデイの占めた構成分子と交替したのである。しかし、それを以て現代詩には音律的關心が消滅したなどと考へるのは早計である。諸君は地上にあらゆる樂器がなくなつたからといつて自然や人生の裡に音律的要素を感知することが出來ないと考へるのか。

定型律でなければ音律的要素がないなどと考へてゐる詩人は、感覺のない詩しか書けず、竟には哀れな不感性に陷ち入るであらう。

現代詩の苦悶

詩に思想又は廣汎な散文的意味を要求し始めたことは現代詩の當面の意慾である。これは決して大正期に於ける所謂內容的と稱するものへの全き復歸ではない。尠くとも超現實派の洗禮を受けた以後に於けるこの國の詩人―形式の重要性を自覺した―の行き惱みの過程に一つの解決案を課題として提示してゐるかに思はれるのである。實際、超現實派の流を掬む人々の大多數が現在、詩に思想又は散文的意味を盛ることに人並ならぬ苦心と努力とを盡してゐる狀態を觀て、吾々はその困難な、殆ど不可能に近い詩法の反覆を思ひ、その根本的な原因を一應考へる必要を痛感するのである。

元來、アンドレ・ブルトンの理論の展開は、その第一回宣言と第二回宣言との間に、この派の精華である技術上の範疇に更新的な改革乃至改造が何ら實驗されてゐなかつたこと再考すべきではなからうか。即ち、詩の純粹性が散文的意味を

抹殺することから始まつた一つの技法が、逆に之の散文的意味を採り入れる効果に於て行き惱むでゐるのである。具體的に謂へば、一篇の詩の各行間、各言葉間に何らの散文的意味を必要としない。即ち散文的意味を含有する處の有機的關聯を與へず、これらの各言葉文字は一篇の詩を構成する各素材としてのみ生き、その詩の價値批判は總體的雰圍氣と、之が主題に對する適應性に於てのみ觀る。從つて之の認識は抽象的情感乃至抽象的感覺に據る以外の方法はない。かゝる目的のために展開したフオルマリスムの種々なる手法が、直ちに其の儘の姿態で以て逆の目的効果を表現し得るか否かは熟考を要する問題であらう。

この表現手法を、そのまゝ第二の目的の効果をも含めるために、現在實驗しつゝある一群の人々は自らの試作を悉く失敗たらしめてゐるし、亦、作者自身も之の失敗を認めてゐる狀態である。その人々は、作者の思想的意圖乃至散文的意味が、現代詩を鑑賞し得べき或るレベルに到達してゐる讀者層にとつて、全然、詮索し得ない現狀を目しても、尙、作者は自らの意圖の第一、第二の兩目的、即ち、如何に書かれてあるかの具象の妙味と何が書かれてあるかの具象の意味とを併せ行つてゐると自認するのである。この現象を或る前衛派の詩人は、其處に含まれた散文的意味を讀者が捕へ難ければ、それは作者自らの實生活の內的記錄として別の意義が存在する。讀者は唯、在來の第一次超現實派の詩として鑑賞すればよいとも謂つてゐる。詩は誰のために書くべきものであらうか、先づ自らのために書くことに何らの異議はないとしても、讀者への念頭なくして詩作することは文學の社會的現象としての存在意義を放擲する時代錯誤に外ならぬ。

この散文的意味を大正期の所謂自由詩の手法に據つて表現する事は眞に易々たる仕事である。乍然、吾々は超現實派の齎した詩法の數々を唯單なる詩の裝飾とは見てはゐない、それは詩の機能上に於ける一つの進化と考へてゐるが故に、之等の尊き實驗と攻究とによつて得た手法を輕々と放棄せよといふのではない。その手法に何らかの新しい改革乃至改造が要求されねばならぬと謂ふのである。この苦心と努力との成果を期待するためには相當數の有力詩人が實驗と攻究を始め

ねばならぬ。この現代詩の苦悶を解決すべき重要なる使命を擔ふ人々、それは詩（ポエジイ）に對する深い洞察と詩（ポエム）に關する明確な觀念とを有する優れたる人々に據つてのみ可能となるであらう。

人間的根據の現象

詩に思想や散文的意味が再び要求され始めたのも人間的根據を再認識した現代社會の思想的現象と其の軌を一にしてゐる。筆者は嘗て「作品に行動するものは人間である。現實を起點とする思考は近代智性の顯現の一形象だ。その現象的洞察に能動する人間が「思想」の反映を文學に來す場合を認容せずして何を肯定すべきであらうか」（「詩文學研究」第一輯）と述べたのであるが、フツサールや新カント派の所謂現象學派や存在が意識を決定するといふ唯物史觀がいづれも科學的思考の客觀性に合流してゐるに反して、デイルタイ的內在性やキエルケゴール乃至ニイチエ的時空觀念から人間の存在を以て實在とし、之の自覺的存在を對象として展開するといふ現代思想を代表するハイデツガーやヤスパーズの主觀的な評價の實在哲學も同じく人間的根據の內在性を深めてゐるのである。北海の新人木村茂雄は味のある詩は絕對に必要だ」と輕く謂ひ放つた。「味のある詩」と如何なる詩を指すのであらうか、けだし味のある言葉である。

毛管現象

毛管現象は水の習性の反逆的現象の如く見えるであらう。水平なるべき水の習性は吾々の習慣が敎へたのである。反逆的現象といふ觀察は誤つてゐる。毛管現象それ自身も實は對象に依つて現象を異にする水の習性、即ち張力といふ一狀態に外ならぬ。いまの詩壇は現象の一方面的觀點で騷ぎ立てゝゐる傾向が多くはないか。少しばかりジヤアーナリズムが詩を迎へたからと謂つて、公平な嚴正批判を誤つたりする。詩人より詩作品自身に就いて考察を進めよ。毛管現象をペンで

剪つて見る位の勇氣と洞察力とが肝要である。

詩作と經驗（假題）

T・S・エリオツト

優秀なる詩人は歳に次々と傑作を制作する。その傑作とは終極に到る迄類似のものであり、また唯單に凡ての方面に於て進歩を示したに過ぎぬものではあるが、實に、そのやうに優れた詩人に期待を抱いてゐる人々は、詩人が制作に當面する時の狀態、とくに現代の場合の狀態を迂闊にも識らないのである。詩人の過程は二元的である。タンタラスの瓶の如くに經驗は次第に累積されてゆくのである。經驗が累積されることに依つて新しい總體を型造り、その妥當な表現を發見し得るのは五年乃至十年間に唯一度であるかも計り知れないのである。乍然、假りに詩人が不斷に最善の努力を拂つて、その水準以下のものに滿足しないとすれば、またかりに詩人が頑として之等の豫言を許さない經驗の結晶を期待するとしても、更に、その結晶が到來したとした處で、その詩人は、それに對應する用意は出來得ないであらう。經驗の進歩は多くは意識されないもので、地下に隱れてゐるものなるが故に、五年乃至十年目毎に一度測定出來る以外には、その進歩を吾々は測定することは不可能である。乍然、詩人は、その年月の間を不斷に制作しつゞけてゐる必要がある。詩人は自分の技術を實驗し試作しつゞけねばならぬ。かくすることに依つて、その技術は、いざ全能力を發揮すべき瞬間が來たとき、ガソリンが充滿してゐる消火ポンプのやうに、充分の準備が出來てゐるであらう。永久に詩を作らうとする詩人は練習を中止して不可ない。詩人は自己の天才的な靈感を無理矢理に絞り出すことに據ることなく、一生、每週のうちの幾時間かを詩作してゐれば到來し得る水準の確乎たる手法に據つて不斷に練習を積んでゆかねばならぬ。

現存する「詩の愛好者達」の仲間に於ては、マーシャルに關する趣味は、ドライデンに關する（純粋な）趣味よりは一層珍妙としてゐる。詩の愛好者達は、彼等達の詩を「詩的なもの」に限定すること自らが近代の制限に外ならぬことを認識してゐないのである。浪漫派時代にあつては多くの散文が詩であると斷定された。（多分、バートンやブラウンやデ・クインシイや又は詩的散文をものしたロマンチストの偶像連中は、自分達は散文を書いてゐると考へてゐたであらうが）そして更に、その反對に多くの詩が散文であるとも斷定したのである。（私見に從へば、ポープは詩であるが、ジエレミイ・テイラアは散文である）讀者はパウンドのエピグラム（短詩）が成果を納めてゐる」か否かを速斷してはならない。何故なら、何よりも先づ、自己の精神を檢討し、自己が將して眞實のエピグラムを詩として享樂し得るか否かを識らねばならぬからである。私にはエピグラムを鑑賞するのだと斷言出來る程の準備がない。それにしては私の趣味が餘りにも浪漫的であり過ぎる。パウンドのエピグラムは現代のものよりは優秀であるといふ事のみは確實である。私は次のやうな事を深く信じてゐる。それはパウンドの飜譯と意譯との仕事、又は壯嚴な詩を輕妙な形式に換へる仕事は、彼の目的が眞面目であることの左證となつてゐる。人は常に詩ばかり書きつゞけてゐる解にはゆかぬ。拙い韻文を作つて、それを立派な詩であると信ずるよりは、韻文であると信ずるものを書いて、それを立派な韻文に仕上げる事の方がましである。パウンドのエピグラムと飜譯なるものは――詩人は常に天來の靈感を享受するものと提唱する浪曼的傳統――に向つての反逆を明示してゐる、その傳統とは、詩人が拙い韻文を詩となして示すことを認めつゝ立派な韻文が更に偉大な詩として通用しないとすれば、優れた韻文を作る權利を詩人に拒否するものとなる。

この序文は、讀者へ次なる一點を明示することに依つて、その責は償はれるであらう。それは、詩人の仕事なるものは假想のグラフの上の二つの線に沿つて進むであらう。その一つの線とは技術の優秀、換言すれば詩人が實際上、何らかの發言を必要とする瞬間が到來した場合、それに對應する自己の媒介方法を常に發達せしめる詩人の意識的な不斷の努力に

外ならぬ。他の一つの線は、まさに詩人が普通人としての發展の過程である、その詩人の經驗の集積と消化である。（經驗なるものは探求し得るものではなく、吾々が慾求することをなした結果として容認されるのみである）更に私の謂ふ意味の經驗とは、情熱と冒險との結果は謂ふに及ばず、讀書と反省、全ての種類の多方面な興味、更に接觸と面識との結果である。時々この二つの線は高い絶頂に於て一つになるであらう、その結果が吾々に一つの傑作を齎すのである。即ち、經驗の蓄積が結晶して藝術の素材を型造るのである。そして數年間の技術の修練に據つて充分な媒介方法の準備が仕上つたのである。尙、その結果、媒介物と素材、形式と內容との區別不可能なものが生れるのである。かくの如く餘りに比喩的な說明をみだりに文字通りに使用することは不可ない。この說明を全ての詩人の作品に適用することは可能であつても個々の詩人の各作品なるものは、その說明から稍々乘離してゐることを示すであらう。私は、その說明を唯、或る詩人達パウンドはその中の一人――の作品に關する序論としてのみに假定するのである。吾々がパウンドの作品を解剖したり、迫力上から作品に一二三と順位を査定したり、更に低い程度の價値などを檢討したりする場合に使用されるものであらう。

この事に就いては次に述べるやうな反對も亦可能であらう。譬へその過程の說明が正當であつても、詩人が、完全な形式と感情の意義とが融合してゐる作品、それを除いた他の作品は何を出版しても妥當であるか否かといふこと。この反對論について理論的乃至實際的に贊意するものが數人ある。その說明を諸氏が採用するとすれば、必ず、その兩方の側を採用することが緊要である。されば、その結果は、詩人と認容されてゐる幾多の人々の公刊された作品の大部分を非難せねばならぬことゝなるであらうといふ、これが反對論を唱へるもの〻最も單純な人の思考である。その事は亦數人の優れた詩人を一緒に抹殺する結果になつたであらう。私は過去に於て眞に心底から詩に熱心な人には餘り會つてはゐない。私は詩人の技術上の進步と個性上の進步との關係を、時折、一緒に合ふグラフ上の二本の曲線として說明して來た。しかし、

その比喩のために諸氏が、その二つのものを全然別個のものであると思ふならば、その比喩は人を欺くものであることを私は附言して置く必要がある。吾々が假りに「完全な」詩を識つたとしても詩に關しての知識は全く僅かなものであらう最も偉大な詩人を、十二人、又は六人、或は三人、更に二人を擧げるとした處で、それが誰々であるかを答へる事は不可能である。乍然、若し吾々が眞に詩を愛好するとすれば、その時こそ吾々は詩の全ての段階を識るのである、否識る必要があるのである。技術と感情との區別——それは、それ自身既に無定見な區別ではあるが——に關して吾々は困憊しないであらう、吾々は、その中の優れた種類のものを味ふことが出來るであらう。吾々は、或る平面上の、あの曲線の結合する頂上、材料と手法、形式と內容との融合を鑑賞するを得るであらう。更に吾々は、技術の優秀性が內容の興味を減じさせてゐる詩も、技術を凌駕してゐる詩も一緒に鑑賞するであらう。（「エズラ・パウンド詩抄」の序文より抄譯）

峽舟

葛井和雄

綠の蝶となつて樹々の若葉の萠えひろがる或る日
閉めきつた障子の奥で一人の女が死んでいつた
奔流岩を嚙む峽谷の部落
谷壁に聚落する家々から村人たちが危げに石々を飛び渡りつゝ此方の岸へとうち續いた
忽焉、死んでいつた者のために
切々涙する朴訥な黑い縞着物の人たちである
遠い平野の村から馳せつけた女の母親は、見る眼にもあまりに老いてゐた
紫にぼやけて重なる山嶽地帶
峰々は寂然として聳立し
峽底は一日の中に數時間の陽の光しか受けない

春は春なれど
今は主ない行李が黃牛(あめうし)の背に縛られて　柩は陽の中をうらうらと紫雲英の道にうすい影を落していつた

岩の上からは樹々の若葉の飛び立つばかりに低くして
深い淵にうちゆらいでゐるその春の色
今そのほとりでしめやかに女の遺骸が岸を離れ去るのである
滔々光る川水
奔流は暫時にして平野地帶に下るのだが
淋しかつた女の一生はもう永遠に　峽谷の村には歸つて來ない

光る蛇

總てが一艘の峽舟に乘つて
岩々の間を激流と共に流れ去る　岩に隱れて又岩に隱れて——
まことに人の地上に袂別してゆく日や
かくも淡く哀しく甘い無言の一瞬時
彼方の岩の上では帽子取つて默然と動かぬ村童らの一群が見える
泣々、峽舟の後にいつまでも光る川水は流れてゐる

二月の祈り

大空の中に
優しい詩と共に　去つたひとよ
白梅が眞盛りの下に憩ひ

いづかたに
幸福のあると言ふのか
翡翠の闇に灯をうちふりて
今宵花嫁の行列長々と
峽谷にこだましてゆく

土佐の國　土佐山村にて

桑門つた子

おんみの心をこめた微笑を手折り
匂やかな音樂を　聽く——
おんみの寶石

おんみの好んだ地上樂園
神々がおんみにつかはした麗しい言葉
花が滿ち
時はかつての榮光をも守り
うすら陽の中に
羽毛の樣に聖典がひらく
恥じる日夜の懊惱
惡醉を舌にのせて倒れた

——暗い臥所
あゝ　おんみのやさしい責めよ
重ねた冬着の中に聲音をなつかしみ
私の天使よ
睡ろみにこゝろをも暖めてよ
幹の苔よ唱へ
神よ
かろやかに額の上にと落ちよ——。

樹齡の血技に春火を點ず

——妻へ——

晩餐の卓で、清少納言の朱唇が
封じられた薔薇色の吐息に身悶へた。
ああ。月のない夜の
ベランダに出給へ。夫人よ。

岡田武雄

スペースに花葉を挿み
星を見うしなつた闇には
時代を超へたモラルがある。
古典の優美な愛は、一ツの尖塔で果實の如く昏れた。
しかし、批判のない夜空の道に露を碎き
燈心の明りに、夫人の眸子は優しい。
夫人よ。
青いリボンを裝り

海の歌劇

夜光蟲を縷めて青い綿羊の緞帳に
夕映のきらびやかな拍手の音がまだ殘る
封印された海のステーヂよ

限りない男と女の連りよ。
リアルのなかに芽生た幻想の起伏が
この闇のなかで
相抱き接吻て霧の如くあつた。
僕の胸に寄添ひ給へ。夫人よ。
國文學者の語らない神秘を視つめ
神話の如く心地よく安息給へ。

小林節子

病的な水平線にヒステリツクな紅いリボンが踊り
杏い映畫館のドームに煙の阿保面が唄つてゐたね
私の睫をふむ人よ
あの瞬間の思念にこぼれ落たのは

マジツクイダイスの樂さではない
VO——　VO——
思ひ出したよに呼ぶのは誰か
追憶の喝采に沸き滾るゼラチンのやうな海に
あなたよ、ベンチをお据なさい
美髯の紳士よ
私は僅かなこの爪に
いま一度灯を點すところです

訪問

スリツパがあみだに空をかむつてゐる白いポーチで、
私は羽毛のやうな肉體を調節する
ロマンの序章にたゝずんだ清潔な貴女の瞳よ

私はむなしくも崩れてゆくコントラバスに似た聲帶に恥
らひをひそめ
言葉のワルツにすべり出すひととき
私は私の窮屈な上衣のボタンを外づしかける
やがてミルク色の裝の中で
私は自分の生活の位置を思ひ出す
（さようなら、美はしい人よ）

白いぐみの花のやうな電燈が青疊にこぼれかゝるその晩
杏いあなたの瞳に
私はしづかな液體の流れを感じ
しきりに爪ばかり磨いてゐた

L'ESPOIR 他二篇

木下夕爾

コルベンのかたちをした
百合科植物の球根よ
その安定度よ
私の思想もそのやうに
どつしりとしてありたいものだ

昨日ブナの古木からとつてきた
つきよ芽よ　私の半生も
おまへのやうに光りたいものだ
暗い厨のかたすみでも——

林

斧の音がきこえる　斧の音の木靈がきこえる　きれいに
つみかさねられた空氣の層がふるへて　樹木のなげきの
身ぶりをつたへる　ならべられた彼らの腕の切口に　樹
脂が滲み出る、涙のやうに　木洩れ陽に光りながら……

晩春

水車はたうとうとまつてしまつた
あんまり時間が重すぎたので
樹の幹にもたれて　僕は待つた　驟雨がやつてくるのを
さうしてあたらしい水がまた水車をうごかすのを

南風抄

羽子田時世

ほんのりと黄色く
流れを持つた春の空に
泥をつかんだ手の
しぶとい反抗の姿勢はくづれ
白扇をかざして
南風を招いた

なんぷう！
かあてんのやうに搖れる
さはやかな春着の女らは
一匹の鮮魚をかくした表情で
ふあつしよんのぺーぶを踏む

芝生の食卓の果實のやうに
みづみづしいお天氣よ
——パパ　コーヒーのお講義ですか
なんぷうひとしきり

陽に凭つて
春雷を聽くめしひの青年は
その胸にその頰に
觸れてくる南風の
絹のさはりに色彩を戀ふ
冬の思念の塀は崩れ
なんぷう！
又ひとしきり

六月の野に寄せて

うつぎ花　白い想ひを咲かせたのは
風も少し　六月の麥穗のかけに蒸れて
それは誰の仕業なの？
しめ忘れた愛執の扉の隙間から
あの儘の追憶が招かうと
花のやうにはにかむ今日ではなくなつた

季節がめぐりくるごとに
ねえ　やさしい野しどみよ
あの日　パラソルは大輪の花のやうに
陽のくちづけに盛り咲き
桐の樹影の片言はレモンの汗を匂はせてた

かなしい風景

（お母さん）

ああ　それらが
行きすがりの花蝶の惡戯であつたなら——

歩いてゐるのは昂然と額ばかり
見えない眼は手で持つて
歩いて來たのは孤獨な自尊心ばかり
咽喉ふたぎ　唾は涸れた
けれど一滴の水が何にならう　愛情よ

歩いて行くのはあの人であつた
光る野は限りなく　赤の他人が一人づつ——
何かを背負つて　背負はされて

奈良　進

お便りをいたします

眞晝の寥けさのなかに
ぽつんと私は佇つてゐた
小鳥たちが愛しく鳴いて
殘雪のひときれを啄んできた
それから私はいろんなものをみた
空の雲
雲のからんだ梢
白樺の樹皮は
透明な艶を滾して散つた
ぽつかりと陽の柔かい道ぎわの
石垣の隙から

街路樹の歌

千古の土は血なまぐさい味がした

蜥蜴が春を告げてゐた
——昨日今日
（お母さん）
ひとりづつ
みんながその道を旅立つていつた

（お母さん）
けれど
けれどみんなが哀しかつた
私のやうに
あなたのやうに
みんながものかなしい風景であつた

小松茂彦

ぼくらはいくたびか革命を年輪に刻んで育つた

枯葉とともににがい記憶を散らし
思ひ出は雲の背に未來への希みとひらけ
ほのかな香料よ
爽やかなほゝ笑みよ
こんなにも
あらしのあとのたそがれはきららかな灯りがほしい
くらい舗道
あの夥しい住民はどこで疲れてゐるか
搾虐の歴史に搖られてきたおろかな蟻
だが
もうかへりみられることもない街角の銃眼
いまくもつた空に奇異な言葉がはねかへり
あの尖塔でも異國の旗がひるがへる
それはたくましい響きがあつた
あたらしい香りがあつた
萠えあがる早春の息吹きのやうに
あゝ熱帶の季節
ぼくらはいつまでも若い
やがて新生の鐘の波紋がひろがると
いつせいにざわめき立ち
青い拍手の風を送る

夜への手記

水島秋夫

さくらの木の下で
青いわたしの孤獨を編むやうに
あなたはながいながい花冠を編むでゐた
あなたの脣のやうな葩が

ときをり　あなたの思辨をうつくしく封じると　わたし
の哀愁のやうに
長い睫毛があなたの頰に翳ををとした
たそがれが　あなたのしろいうなじと
あかねのむねのいろのみ殘して
ものくるしくをちてくるころ
あなたはかなしいいつぴきの蜻蛉であつた
美しい花冠の上にそのうすい透翅は
悲劇のやうにせわしい談話ををとすのであつた……
その森を拔け
わたしは夜に向つてわたしの窓をひらく
夜空の下にわたしの孤獨が湖の
やうに光りながらながれてゐる
わたしは窓から白い手を振る
森にむかつて美しい花冠にむかつて……
ああ　その白い手は
そのまゝ　わたしの窓にゆれる
青い思念の樹木であつた
雪空をまつかに燒き
森はめらめらと燃えてゐる
「ああ　私の思念が昆蟲のやうに燒かれる花冠が」
ひらかれたわたしの窓を截り
霎にぬれながら
あなたの蝶は涯しれぬ濕をどこまでもどこまでもとんで
ゆく
夜の窓から
わたしはひとり白い手を振る
白い手を振る

沙漠

清水達

茫邈たる沙漠のうねり
悄悄たるニヒルの果て
怠惰な肉塊
おお
その濛々とあがる體臭の強烈なこと
　歩ゆまねばならぬ
　歩ゆまねばならぬ
蹌踉と足跡を殘して先達は去つた

忘却の疾風(はやて)
ハムレツト
永却の苦惱を背負ひ磁針を失つた隊商
血の色に太陽は變へられた
沙漠の挽歌
ああ
神を冒瀆したひとびとの辿るべき途

はげしきをとめたち

西山五百枝

彼女等ははげしき愛情を持し
彼女等ははげしき冷酷を爲し
彼女等ははげしき社會を行く

彼女等ははげしく印象し
彼女等ははげしく忘却し
彼女等ははげしく生きる
彼女等ははげしく歌ひ
彼女等ははげしく育ち

彼女等ははげしく死する
彼女等ははげしく當り
彼女等ははげしく體經し
彼女等ははげしく平凡化す
はげしき故に彼女等は詩無く
はげしき故に彼女等は文學なく
はげしき故に彼女等は記錄なし

波止場

岩谷健司

港には船がある
透明な煙が

マストから立ち昇つてゐる
港の狹霧は
潮の香がする
その香を吸つて生長した男の子が
二、三人洟を垂して遊んでゐた

港の別れは
センチメンタルである
うら若い女性が
裾を亂して通つて行く

港の春は
鷗の春である
ポンポン蒸氣に追はれて
一せいに舞ひ上る
鷗たち

僕の青春は
港に浮ぶ濁つた油と共に
洗ひ去つて仕舞ひ度い

投影ヨリ拔ケテ

木村茂雄

帶ビタ豫言ニ會釋モセズ
方角ヲ指ス過肉ノ移住ヨ

一路ハ雲脂ニ紛レタ風景ヲ越ヘ
安易ナ肢體ヲ彈マセルダケデ

光澤ヲ搖ブラウトスル

都市ガ
裸體像ノヤウニ雲ノ下ニ
横ヘルコロ
ヨウヤク鞭ノ響キノ如キ
精神ガ
周圍ニ己レノ血管ヲ拾ロハセタ

白イ首ヲ伸バシテハ
現世紀ニ投影サレタ群ガリカラ
切リ拓カントスル鼻穴ニモ
コンナ翼ノ音ガ
ト
眼ニ及ブ限リノ透視デアル

その殘す跡かた

その殘す跡かた
いまは砂上に甘え戯れ
うち寄せて碎くる水泡(みなわ)に
夙(よう)のむかしを
搔きたてる潮鳴り

如何なれば
唇を閉ぢ
眼を外らさんとする
おゝいなるどよめき

空虛(うつろ)はこゞれ
眞珠(しんじゅ)なすひかりの
佇みて火照らす白き物影に

胸せつなくも鬪ふる

傳說

圓塔は荒廢して
蔓草はしつかと取り捲いて入口をふさいでゐた、
その内部で物語りのやうに美しく女が死んだといふ、
常に身に着けて色褪せた上衣を枝に吊して、
私は闇を振り返へるやうに覗き見やうとする
歴史の複雜さを探ろうとする、

風は低地に流れ
息ぐるしい刻の廻轉の響が
背後でスリッパのやうに往き來する

鹽谷安郎

地平の遙かに蒼白を知る。

窓わくに置いた沈默の掌は一まいの貝殼をつかんでゐた
それは化石の匂ひに表情して
私を秘そかに陷入れやうとたくらんだ
指先に蠟燭のやうに新しい歴史の焰を燃して
雲とその翳の方へふり返へつてゐた私である、

室樂

くづれそうにない穹を撫でる雲
仰げば額に落ちて來る蒼いかげ
そら色の風のなかに花の微笑がある
梔子の靜寂がある、

この花かげに、もの狂ほしい惡鬪が秘そもうとは
私には使ひなれたサキソホンがある
つねにつるぎのやうに磨がかれて
涯しない空間を支へて
私の血を謳歌つて吳れる

秘そやかな饗宴

——詩帖より——

國廣勝太郎

★

草むらに寢ころんで碧空の陽をみあげると
——少女の忍び笑ひが流れて來る
波止場に佇んでマストの三日月をみつめてゐると
——少女の咽び泣きが漏れて來る

★

くづれそうにない胸も
五線紙のかげではお玉杓子のやうに浮き沈みする皺動を
もつ。

雷は何故、あの樣に怒るのでせう
あの鞭は痛い、あの音は悲しい

★

初めてあなたにお眼にかゝつた時の
あのもの柔かな印象が忘れられません
お白粉の白々しさは不潔なものを感じます
紅の毒々しさには邪淫の刺が秘そみます

明朗でゐて素直なものごし――美しい眼！
あたゝかい心の花が無性に嬉しいのです

誰も知らない胸の秘密を萠えあがらせよ
純潔を抱いて青春の日の花束に唇けせよ

私の胸にほのぼのと甦る光、一片の抒情
あゝけふの日の爲にわが幸は無限に流れる

腸にしみわたります、戀の傷手の妙藥とは
でも、新妻にだけは内緒になさりませ

綠の丘を桃色のリボンを結んだ少女が馳ける
笑ひながら、陽炎に飜えるスカートの水色を

砲身が燒けるので氷囊を乘せた少女！
碧の海のふくらみをみつめて涙する白日夢

月のかげる松林から呼んでゐる笛の音――
少女のつぶらな瞳には愛しい眞珠が胎んだよ

哀しい木枯の唄、灰色の空に閃く旗の日！
人間の苦惱も海底に沈んでゆくと云ふのか

夏の日のアスファルトに忘れられた氷の悲鳴
紅い屋根、青い壁――腦病院の白いベット

動いてゐる空、震へてゐる大地――
あつ鉛の空を燃えながら悶える不死鳥！

たちきつてもたちきつても尙たちがたい血緣
いのちのきづな、いのちのきづなに焰せよ

こんなにもせつなく　戀の礫――
胸に炎えるなら燒き盡せ喰べてしまへ

燻ゆらしてゐる紫煙をみつめてゐると
眞白な蝶がパイプの煙から舞ひあがつたのです

動いてゐる海、海の底ではぢけた少女の胸

夕

レキシの沈澱した小川を
子守娘の合唱が流れ
翁は錆ついた扉の秘密をかたる
束ね髪をかきあげて乙女はたくましい乳房に脈搏を感じ
ひそかに暦に刺繍をはじめた
小供達の瞳孔は金色の國に角笛を吹き
若者はどろ〳〵の鍋底に
綠色の食慾をもてあそぶ

眞紅な血汐が波の花となつて死の海に咲いた
お前のふところで　まどろんだ事がある
素足の少女―あの夢を今一度甦らせよ

小山恒兒

さて傳統のとばりは節くれた双腕に
小麥色のノスタルジヤをぬく〳〵とおし包む。

五月

噴火口を越えて風がやつてきた
なつかしい僕の季節
針魚を追ふ子供達の背中に
綠色の太陽が大きな影を浮べて

忘られてゐた歌が
ちろちろと瀬を流れる
鱗のしみた松笠のおじやみがえがくピントグラスの風影
を　思出が手をつないで通つた。

廢園

小池亮夫

その向からには何かがあるだらう
何かが見えるにちがひないと
登る高いところである
來て見ればこの丘も草の褥は薄い
私のからだはと見れば
吹く風が通らないといふだけ
陽が透らないといふだけ
凝視めることの今更なんにならう

（針魚）　田の小川にゐる魚でアユにたもの
背に針が有るところら私達は針子と呼ぶ
（オジヤミ）　小女達が小さな布の袋の中に小石などを入れて
ポン〳〵と上にあげて遊ぶもの

ことごとに　その瓜
逆だてなければならない茨の運命（さだめ）よ
水草の莖はそのまま
水は春の眞晝陽を光つてゐる
廢墟は白く痛いものか
また蛙はなんで鳴きやまない
思へばこの毀れ朽ち果てた園は
その昔　大清朝の榮を誇り

圓明　長春　萬春を合はせて三十八萬坪
あのパリのヴェルサイユにも勝る
豪華さであつたとか
今は　陽炎の春を奢り
大理石の壞れの白く　目に染みる
花と咲き　かしづかれ　乾隆の帝（みかど）の
瞳に慕ひよられたであらう
現である陰影の　そのかげに
點々と憐れなは花か　然し
よく見れば　人生きる國は
黄色く濁つた土の起き伏し
畦のまがりに　こごみ　蟲とり
さつきから用足してゐる姿見え
驢の汗し　耕やすがある　ああこの今　私に潜んだ戀が
あるとしたら私はその戀を　この廢園に葬らう
葬り　をもむろに　先づ上衣から
ぼけつとの袋うらがへし
わたくづに　煙草のくづれ
南京豆のかけら　それから
私の思出のよごれたち
それから　それから　お前たち
春風にのつて　飛んでお行き
私の手のせなの色
遠く遥かな梢の煙

足袋

堀口太平

足袋を干した
日は暖く

風は冷たい
呆り手摺にもたれて居やう
微かな笑を浮べやう

誰かゞ待つ氣持がする
誰かゞ待つ氣持がする

櫟

黑い櫟の木が若葉した
うすいひは色の葉だ
若葉は何時も搖れてゐるものなのだ
聖人の樣子

栗の花

栗の花
風に飛んでゐる

×

果汁の樣に明るい日光
囁く梢
佇ずむ悲しみ

×

栗の花
風に飛んでゐる

×

私の悲しみはこの樣に
目に痛い

×

小さく靑く
そしてばらばらに
漾よつて居る

野立

小林正純

又しても蓮翹の蝶が鮮かに舞ふところ
綠の布園は新芽を萠す　その饗宴をうけ
きらきらと降る暉のもとで松風の號を聽き
今北野の客となりて　聖土の花毛氈に座し
華堂の軒菖蒲に讚を漏すとき
亭主は靜かに杓をひくのであつた

――開天閣苑、二千六百年皐月上浣――

月見草

勾配表の手信號の長い影に　夜露を饗けるカツプを捧げ
る黃色いヴヰナスたちよ　薊の坊主頭を撫でながら　私
は身を偃める　私は足を伸す　そして雨の降らないかさ
かさの土の香を拾つて　私には酸漿草の葉つぱとともに
雨の日の秘密をたづねるこころ
ふと私は神々の黃昏を聽きたくなつて　何處までも果し
なくつづく　冷たいレールに　短かいモールス符號を打
つのであつた　けど　何んの言葉も還つて來ない　ふと
汽車のなかに居る心地に誘れて　海のけしきや山の眺め
を思つて見たが　私には愉しいきおくが甦らなかつた
しかし頰を膨して物凄い衝動にもびくともせない　そな
たのか細い莖の精液が私の體內に流れ始める

窓枠に寄る夏

梶浦正之

―あなたは行く春を氣にしてゐますね　あの胡粉の禿かゝつた蝶の
やうに　御覽なさい　眞黑な小供たちは眞白な陽に向つて　碧い圓庭
の周圍を巡つてゐます　手に手に菖蒲の劍を翳しながら

―あなたは人の世の動亂に脅えてゐますね　綠に濁つた容器に逞し
い鬪魚は疲れたのだといつて　そこから生れるいくつかの水泡にも硝
煙の匂がするといつて　だがやがて銀鱗の朝が訪れるでせう　牽牛花
の蕾を破る爽やかな空氣とともに

―あなたは新しい體制の進展を危ぶむでゐますね　嬰兒の育を想ふ
母の瞳のやうに　ほうら　鐵線の花の白い紋章が點々と浮ぶ生垣に
孵化れたての蟷螂が軟かい透明な斧を振つてゐますよ

―あなたは空しい時間の距離を縮めようとしてゐますね　結論と解

決をいそぐために　柿の實の赫く熟る日を待つ烏のやうに　だがこ
の窓枠からも望めるでせう　あの杳い夕映の空に群れ立つ雲の峰が
大らかな巨人の歩みのやうに

朝

松村一美

ガラスの頰に暖まると
風を覺え
小さい殼から目をさます
私は道化役者のやうに表に消へた
一日の誇りが朝であるやうに
そして私達の幸福の爲めにも

白い匂ひと喜びとを吸ひながら
快よい歩調を取つた

工場手帳

長谷雄京二

プレス

指は鐵板を　指は鐵板を　指は鐵板を　指は鐵板を　指
は鐵板を　指は

厚さ一センチの鐵板を百分ノ一秒間に切斷する鐵塊一〇〇壓噸の急降下へ

指は鐵板　指は鐵板　指は鐵板　指は鐵板　指
は鐵板　指は鐵板

急降下する一〇〇壓噸の切斷へ

指　鐵板　指　鐵板　指　鐵板　指　鐵板　指
鐵板　指　鐵板　指　鐵板　指　鐵板　指　鐵板　指
板　指　鐵板　指　**指！**

旋盤

鐵の傷口へ
酸素の速度で吸ひこまれるドリル
マシン油の洗滌に銀色の繃帶を解きながら

—2600・6・18—

胸甲類

寺元亮子

そとには胸甲類の武裝をして
目玉ぐるりぐるり
そのくせ黑と白より見ないと
時に戀人はおこるのです
複眼だつたらどうでせう
あなたの手が千手觀音のやうにざわざわして

いつたい何がほしいのやら
一つの手には私の手を
一つの手にはシヤンカリを
おちよことジョツキと
グレーオブグレー　バイオレツトグレー
モノクロムチント　ニユトラルチント
あゝあゝ目がまはる
あんまり無理はおつしやらぬもの
鋭利な螫ふりあげふりあげ
泡をとばして
理論闘爭もおきまする

海の祝宴

辻井健彦

ガアーツと牙を鳴らし
何んと巨大な口を擴げた醜悪な表情なのだ

海底を深り
宇宙をすべり
飛魚に群れた
Uボート
つぶつぶ
このやせた旅人を讃美する
鮫の齒と無數の眞珠を首にかたむけた

盲目の沼

山路青佳

あの子の眼窩の奥には　いつしか蘇苔色の葦が根を伸ばす
――あの聲を遽く喪失つてから
泥土を搔きわけて　いまではみんな淡い日輪型の魚紋を燦つ

×

靡びく穂先であつた
睫毛いろの夢を灯した
濕つた窪地でいちにち風と
あれはにぶい靈柩車のやうな音符を奏でた
その底に羅い紫昏の煙幕をかゝげ
沼の怜悧は
盡きぬ松葉の苦味を嚙むのだ

型なきアトリエ

上松ちか子

此處はモデル畫家の庭園休憩室である
雜草と羊齒のとり卷いた動かぬ池があつた
年輪を數へた化石の像は午後の縞を着て
永遠の睡りをつゞけてゐる
肥えた女の健築者よ
中天に糸を張りまわしてゐるので

緣風に落された蛾は縊死を遂げてゐる
蟲類が彫刻した褐色のベンチで
畫家は欠伸を吐いているのだ
高價なモデル
半裸體の白き處女の胸は薔薇色のボタンを付けた新鮮な果實
畫家の思念はその上に滑り落ちてゆく
さわやかな青天井の音樂はあたりの靜寂を破らない
パラシユートをひろげて降りた一羽の鳥は
畫家のお胎をかけまわしてとび立つのであつた

鄕影

後藤敏夫

寒春の日射し幕桁を通し
同船の松山言葉語る女は
たゞひとすぢの曇りを浮べゐる
緣なす海邊のどよめき

中程に　いな舳先の浪に
一閃鰹の背躍る
あゝ　船飛沫
――散りゆき　散りゆき
郷影のシネトフオーン

見れば水平のあなたに
黒々と浮べる衆船の腕
鰹の背渉り生活樹てゐるよ

私は珊瑚礁知らず――すは珊瑚礁辷り
船は思はず陸地を目指す
早や素脚の女共眼に映り
――さよでありまするけに
懐しき言の葉よ
青き海滿ちてゐる私の故郷は
水を知らずに未だ南にある
地帶の影に横はりても

言の葉のおなじゆして
私は知らず青海に溺れてゐる
淡路行――思はれの日よ　ああ
されば　にや
鰹の背躍りゐるか　私の故郷は

書簡

藤浪里子

もはや降る程に星のかゞやきますれば　テラスに殘された貴方の言葉を拾ひ集め　花の日歸る唄のやうに　私は密かにも泡立つのでしたけれど久しい旅の心でもありませうか　貴方のお手は羊齒の葉のやうに冷たく　レエス編む私の指は　ひなげしのうすい吐息のやうにそつと止るのです　影の足音なれば　優しい折り返しもありませうと　あはい結び目を作り　流れの底に合掌る貝殼のやうに　ぢつと待ちませうたかい雜木林の上で星が一つ消えました　とほい沖合でもまたひとつ……

あの疲れの様に哀しいまどろみを開く　群雀の唱歌法など　もう何も
希むことのないほどに滿ち足りた陽射でございましたが　飾りボタン
の際間をつたふて　昨日も今日も暮れの鐘は　空しい花粉をこぼして
ゆけば　たとへしもない白い香のわびしく　互に送りあふ輕業師のや
うに　アンテナは顫へてゐる　ぶらんこからぶらんこへと　地平線が
からむ雲たちのソアレエは　かくも華やかに　ベコニアの血ばかりを
ふいてゐる

短章

森下紀男

吸ひさしのたばこと一緒に
毛細管を突き破つて
悲しい　現實!!
親友の戰死がもたらされた
（便り）
破壞された計算器の屍は
透明な歷史の蔭に花を咲かせ

白焰の噴き出づる瞬間には
子午線の烈しい情熱が
一聯の白紙に
眞實の姿態をのぞかせた
（世の捷）

メロンのにほひ
冬薔薇の紅さ
鱗粉雲の鳥籠にインコが唄ふ
靴音の輕い看護婦は
青春を意識してゐるのだろうか
私の靈魂は肉體と別れ
杳かな忘却の野に這入つてゐた
（麻醉）

掌

國分尙治

はるか指縫のあたり　默座する山脈に

北風は稜々とひびき
河は涸れて　肋骨をさらし
礁野には鴉の影さへよぎらなかつた

いつの日から纖掌に不吉な翳は
掠めたのだらう

らんぷをさげ　はるかな道をまさぐつた日
距離は濡れた額のうへにあつた

よあけの星辰は薄明によろめき
青ざめた思念は　きれぎれの知能線に墜ち
ひとり冷燈のかげに手紋を讀んだ

虹はかかり花々の絡んだ掌文はとほい
あ　閉ざされたまゝ　穹を抱かぬ地圖であつた

干乾びた海

丹羽哲夫

限りなき無聊と共に
干乾びた海を徒渉つた

いつとなく聲も枯れ
呼べば空ろに漂ふあたり
しかも聳え立つすべての壁は四散する

裂かれた指股を泡立つ雲にあて
僅に見開く地平線
伸び上る
貴女の肢體は透けて來る

看護

竹内はじめ

そのとき雲は役に立たぬ

かくれる文章のとぎれめ
馬の上を鴉が飛んで行つたために
貴女へ話しかけるきつかけ
ひどく聲音までうはづらせて
くるりと顏いつぱいに縋りつき
出來るだけにぎやかにいたはつておあげ

そのとき愛情は看破される
さう
怒つてはいけないなんの歌を
ほんのすこし貯金のてはじめ
貴女に午前の並木を歩かせる
ひところ、なめらかに若い自動車
否應なしに
出來るだけ氣にもとめず買つておあげ

そのとき約束の文字は虛しい皮膚となり
でも

ながれる發音を肉ふかくきざむ
骨のふしぶしに應へるのは貴女の訛り
獨善の肉體がくだけて行く
探り樣もない音響のきれぎれをまで看取つておあげ

詩集青嵐・寡作玉什ヲ以テ鳴ル梶浦正之ノ近業三十餘篇・澁キ傳統ノ金扇ヲ銀鱗ノ清流ニ映シ生カス現代詩性ノ昇華ハ颯爽タル青嵐ノ一陣ニ似タリ・外觀ハ四六倍大判・厚表紙・函入・內容紙百三十斤アード全模樣二色刷・肖像印畫冬木皎之介作・著者筆蹟凸版入・最豪華版・限定二百部・頒價二圓送十四錢・刊行處・東京市麻布區霞町壹番地・詩文學研究會・書店發賣ハセズ・好評殘部僅少

現代詩壇主流の動向

小林正純

近頃ジャーナリズムが詩を迎へ始めた。これは欣ぶべき現象ではあるが、これを以て必ずしも、詩壇が對社會的に歩を進めたと、言ふことは早計であろう。「中央公論」「改造」「文藝」等はともかくも日本の言論機關の代表雜誌で、現代日本の最高智識階級を讀者として控へてゐるので、尠くとも、之等に發表されるものに、所謂大衆的に低俗な手加減は必要としないであらう。しかし、とまれ、少女雜誌程度のものが中にはあるのが殘念であるが現代日本の主流的サンプルとして一瞥して見るも興味があろう。

「改造」四月號は五名の作品を並べた、先づ村上菊一郎の「崖の下」對象に向ふ客觀的描寫の効果は頗る幼稚なもので、この境地なら、木下夕爾に數歩を讓るべきだ。田中克己の「期待者」かふいふペーソスだけで現代詩の意義を十分示してゐるのだらうか。實生活の記錄的描寫は、當然現實的であるから作品の意圖は、ハツキリ握把出來る。然し乍ら大正時代の所謂自由詩と比較して、何らの進展性をも認められないことは哀しい。伊東靜雄の「小曲」に到つては沙汰の限りで、雨情の民謠でも讀むだ方が餘程氣がきいてゐる。菊岡久利の「母たちは」も同樣これはむしろ都々逸に丁度持つて來いだ。草野心平の「富士山」これで稍々本格的な詩に接しホツトした態である。この詩の意慾は相當に書きこなしてゐるが未だ漢文的生硬性が目障りで、形容に今少しくエスプリがあつて欲しい。

「中央公論」四月號は梶浦正之の「蛇穴を出づ」を掲げた。現實的な描寫を以つて始り、主觀的な世

界觀を時局的なサタイヤまで進めて、具象化したのは堂に入つたものだが、作者は最近亦詩境の轉換に惱むでゐるかの樣である。「豹」時代そのまゝ內容的逆轉にならぬよう作者へ希望する。同誌五月號は金子光晴の「眞珠灣」である。洗練された言葉が長い幻想的な構成を巧に救助しつゝ、聯想の飛躍に乏しいが最後の數行に幾分のリアリテイを覗せてゐるところは、さすが氏だけの作品である。「文藝」四月號の石中象治「心くるへる少女へ說」明的な言葉を以つて訴へてゐるのでなんとなく物足らないことは事實で、具象的な客觀性を要求する。同誌五月號菱山修三の「夢の庭」所謂菱山式の散文型のリリシズムから一歩も出ない。藏原伸二郎「季節の生活」白秋型の內容と抒情との距離を全然認識出來得ない「疊」山之口漠　生活的素材が平易に浮彫してあつてすつきりしてゐるが、何だか迫力がなくつて物足らぬ。「釦のラケット」北園克衞。聯想の各個が何ら有機的な關係がなく、ブルトンの第一の宣言の當時と同樣の觀方をしなければならぬ。全く助からない。作者の新展開を希む。「春の秘帖」山本和夫　平易で構成的な作品である。然し恐らく老巧の立場から、かう言ふ牧歌的な情景に一脈の新鮮さを保つ方向を示してゐるが、も少し强烈な意慾を用意して戴きたい「古城のほとり」北川冬彥シネポエムと但書があるが、その素材や素描の取扱はシネポエムらしい變化を持つてゐるが、散文化された作者の筆先が主題を毀してゐるのを見受ける。

以上讀了して吾々は、現代の主流的詩人の動向が那邊に存在してゐるか大體想像がついたのである。乍然、亦吾々の期待すべき眞の現代詩の主流はと云へば如何なる人にその根據を求められるか、それと同時に現役詩人達は吾國の古典的雅趣に對して、忘却してゐる作者が多く、民族的な意慾を詩の滋養價である思念に漂せることに努力してゐる作者が乏しい。其處へ行くと俳人達の季題に對し特殊な寂を巧に匂せてゐる事實は美むべき事であることを附加へて置く。

ブツク・レビユウ

楓月庵主人

山田岩三郎詩集「天の兜」は現代詩が苦悶してゐると同様な二つの角度を含んでゐる。即ち前半に納められた正統的な手法に據つて容易に把握された思考の世界と後半に編入された形式主義が齎すモザイツクな心象の雰圍氣の境地との二傾向を明瞭に示してゐる。作者が之を如何に解決するかは興味ある一事である。作者は既に相當の年齢を重ねてはゐるが多才縱横に惠まれた青年的詩能は將來のよき展開を約束されるであらう。

後藤敏夫詩集「記念寫眞」著者は自ら「何も分らないで前提詩集を出す。たゞ分つてゐるのは小さな變遷だけ。但し底流するものは何時も同じで、變遷の價値は何時も小さいと謂ふ。底流するものは不變ではあらうが、その地脈を表現する濃度に於て作者は相當の變遷の價値を自認してよい。この對象と四つに組むで鬪つてゆく肉體的本質には有力な底流を潜ませてゐる。所謂モダニスムの流行には無頓着な逞しい精神は彼獨自のスタイルとフイルムを心にくい迄に展開してゆくであらう。

街の光る遮蔽物の蔭から
ミレーの想つた夕暮が
そつと顏を覗かせた
默つて見てゐる偉人達は
それが何であるか御存じない
單純にほんたうに子供のやうに
手を合はせさへすれば分るのに
偉人達は何も知らない

――「記念寫眞」中の「夕暮の詩」の一節――

寺本亮子詩集「地衣帶」まことに譬へしもない強烈な自我が此處に具象化の花を開いてゐる。作者が自らの過去に於て一切の人間的體驗と苦惱とを鬪ひ拔いて來た事は、純情の炎をより熾烈に燃やしはしたが決して衰えさせはしなかつた。眞に欣快である。讀者はこの一卷に所謂世俗的に不幸な一女性の凄慘な一大叙事を感ずることは自由であるが、唯、それだけの印象に止まることとなく、この作者が如何に詩藝術の上に自らの哀傷を力強い意志と情熱とに依つて昂めようかとしてゐる聖いスタイルを觀とるべきであらう。

藤村誠一隨想集「詩人複眼」詩人の隨筆といふものは視野が狹いといふ批評は世に多く受ける處であるが、この作者は視野も相當廣汎に渉り且亦その角度も變化に富んでゐて退窟しない筆鋭の輝きもある唯望むべくば、泰西の詩人のやうな詩に關する比喩や寓話が今少し加へられてゐたらばと思ふ。

片平庸人の「鴉追ひ」民謠集である。極めて音樂性を効果的に顯はしてある爲め、內容的素材に新鮮なものが乏しい嫌がある。この方面に於ける評者の觀點から謂へば、民謠なるものは地方色背景なくしては生き得ないものと斷ずる故に、この作者の住地たる北海道の自然的素材と人情風俗がやがて之の優れたる音樂的技術の上に採り入れられてゆくを望む裝幀亦凝つて枯淡と雅趣に富んでゐる。

衣笠夢二「貝がら」二行詩集である。評者は之の二行詩なるものの形式の必然性に就いては無智識ではあるが、作品は相當にヴアラエテイに富んでゐて更に適確なウキツトやサタイヤに含んでゐて洗練されてゐると思つた。

多賀城「石と手と空」碧梧桐の流を掬む無定型句集である。實生活的な觀念を基調して瞬間的な狀態を捕へてゆく手法に少なからぬ興を受けるのであるが、稍々人生に對する諦觀的な低徊趣味が仄かに感ぜられるのは、この種の作品にとつて新しい展開の衝害となりはしないか。

ゆびの信號

大橋正種

つぶれたトタンのリング・ノートは
一片の實感をとばした
白いリウゴンシスの美しいこと
ぼくは右へ曲ります
のばしたり　ちぢめたりして
指先の香氣をとばすと……
蜜柑のつゆでえがいた蛙の幼蟲は
くりくりと躍つた
あなたの石頭にとまつてもぼくは
鵜のやうに……
青々寒蘭のかみをひからせながら
とんでゞる子供と
ヒン血の頰にぎひんをためてはうたひます

タイピスト

底冷のする青さの中で
私の手足をわけて鶯が鳩いた
ここを……
白いリンネルの中の黄金の蕊がたゝいて
母の　ボロを積み〳〵洗ふすきとおるお貌には
ベルリン・ブルーを吹きつけてゐる
私も亡母がほしい

抄

嶺　皖彦

人なつこく　あいさつする　あさい季節　窓をおち
る陽ざし　日かず

なにかうすい　膜のやうに　あせばむ掌の　あいよ
くなら　やくそくなら
まぎれもない　わかばの瞳を　はかなくした
しろく燭かげ曳いて　母の　なみだせみた　幾とせ
かけ　勞れかさね　かうもほそい　ははの肩に
幾とせかけ　負はれてきた　業は　母の　なみだを
みた
母子ふたり　ふぶく倫に　さしかけよう　傘ももた
ず
白湯のあぢのやうに　杏い　血すぢだつた
來るといふも　來ぬといふも　記憶ばかり　あけく
れして
ふつとひらく　おもかげでも
にほひめいて　褪せるおもひ　こころとほさなりゆ
きなど　風にすぼむ　けふばかりよ
山のみちの　一歩ごとに　胸にささる　草の芽萠え
いつもひとり　沈淪する　悔をそれて　急なまがり
そんなやまの　小逕をふんで
けふもあすも　呼吸せはしく　こころ濃く　こころ
こまく　爪さきだつ　ぼくのいのち　信じてゆく
愛してゆく

朝

津川民子

コツ〳〵と明けきらない街の舗道に新鮮な餘韻を
殘して去つて行く小娘
着古したワンピースに　ピンク色のポレロが戯れて
風と共に遠ざかつて行く

果物屋の店先の櫻んぼを思はせる豊かな頰
黒子の一つぎりある耳に内巻の髪は朝の挨拶を濟ま
せる
ふと耳を掠めた生活に苦痛の無い人達の微かな寢息

Peace Front

竹岡範緒

デークフリートの白い浪がしらに
ハーゲンの氣違ひ染みた　青空が
讐へギラギラ金色に輝いても
すでに　タルンカツペのない赤裸裸な熱情は
卑屈と思はれる　程に冷靜であつた
そこには
アリサのかなしいきんのものさしはどこにも見へな
かつたし
ゴリラを飼ひ損ねたミシエルの

沸々と胸に沸き上る嫉妬にも似た感情
ふくらんだ乳房が急に凋むのを感じた
赤茶けた煉瓦屋根に味けない一日を又見出してしま
つた

泥塗れな日記さへ　見あたらなかつた
わが親愛なる健康な村人達は
山村の一角で胸を反らし
純白なレグホーンの様に
あらぬかばかりたべてゐた
時時曇るレンズをすかしながら
渡金した　貧らしい自らの歴程を
今日も　たんねんにほぐし

例の如く　そして

朝はあをい馬のたてがみだ

脚雄

橋の　たもとの　片べりに
羊の　いろが　もえあがり
ピリオドから　また　ひとつ
川が　ながれ　はじめる。
とたんに　向ふから　近づく
艀に　こたへて
こちらでは　大急ぎな　操帆作業
東から出發する
朝は　あをい　馬の　たてがみだ。
星の呼びかける言葉に
どこの平野も、沙漠も、水車も昂奮したが
柱時計をかかげる連甍だけは
いたづらに唐草模様の寢あせを掻いて

例の如く　明るい朝を迎へるのだつた

欺かれた點燈のなかの英雄のやうに
眼藥ばかりを愛用してゐた。
川はあざむくことのできない　つめたさで
今日も　無數の　時計を　うかべて流し
川でない　ところに　橋をわたした
城門の口は、はや　にやにやし
そこから
混血兒のやうな　なまあたたかい　風が
安心を　つきぬけて　語聲を　つよめるたびに
驚きと、歎きと、權威はオイルのやうに疲勞し。
毫の　現實に　迫る　不快な風だ
かくべつな　あはれみを　請はず

あやつる道具　さへ　ない　身に
それらの、朝は
背後におしかくし

貝殻に囁く

梅澤恒夫

夕陽に默す　いたいけな
あなたの肌に
憂き深く　幽かに開かれる
重たき冊の音を聽き乍ら
わたしは　いま
しづかな日を　想つてゐる

悪熟にかたむきかけた　アーチの
幾つかを通り抜けて來たわたしは
裳裾をひるがへす女の　鋭さを
決して
あなたから　もとめようとはしない

さつと　サーベルを　ふりあげた　光線が
騎兵のやうに　ちらつきながら　かけてくるのは。

屍のなかに生きる　あなたの肌を
冷たい沙でかくす　指のうごめき丈けは
わたしの贈る　唯一つの
あなたへの心遣ひなのだ

あなたに刻まれた　幾條かの影よ
それは青銅の飾りのなかに　輝き　ともすれば怒る
非情の唇は　パトスに逆らへる怖れなき思念のごと
く……
それら　幾重にも重なるトルソの耀きのなかで
わたしは　みづからの落着きに　ヂッと耳を耳欹て
るのだ

花などは咲いてゐない
玻璃の夢は　既に　遠のいてしまつてゐる
けれど　わたしは　寂しくはない

或る生命

稲垣美子

ペン字は枯枝と伸びて
日記は冷めたい秋の弔歌をさゞめく
幾つもの月は
輪廓を失つた化石となつて
枯枝にまどろむ
雨に光る蝙蝠は
なほ野心にはゞたくのか
小さな會話を抱いて
惠まれない醜笑をもらす

はるかな峽にオークルの逞ましさを尋ねながら
わたしは　いま　しづかに祈つてゐる

春

佐藤青雅

遠い森から
夜なれた鳩が訪ずれて午前零時が來た
机上に碧い格子がゆるやかに
一回轉する
ゴシック風な活字を踏んで
土筆の栞がしきりに童顔を描くので
はるかな村里の空、童話の群は原色となつて……
山燒の小道の歌が私の新生に谺する

寢覺めの耳近く
朗らかな鍛鶯のリズム

鍛鶯の啼くころとなつて
ふくよかな土の香が
どこからともなく漂ふてくる

自然署堀り

かくも汗みどろにはなるまじと
堀りて　堀りて
奥深く堀り下げる
土まみれの自然署堀りだ。

蟹

月夜をいとふ
海底の蟹
闇夜を駛けめぐり
狂奔してゐる

郷愁

松下眞木子

もはやはかりしれない距離からの
まなうらに展ける風景
色紙細工のやうな
聳り立つ山々も
煙をなびかせたちさい列車
コバルトの手巾振りそれは海と空に
より迫る亡母へのあこがれ
ああ月への輸血を繰返そう
やがて列車にゆられ
傷む想ひをちぎりながら
殘るものは去りゆく私だけだ

二十の春秋旅裝を彫刻む苦しい詩帖に
母の國求めて明日の頁を繰る

その日の視野

朝井美智正

ねころんだ少年の
どんぐりの様な瞳の中で
青空と煙突の構圖は
ガラスの圓天井と
黑い一本の支柱であつた
そして
白い金魚が泳いでくると
それは
杭の打込まれた湖になるのだ
少年は位置を忘れた
金魚が逃げて行くのか
あ、煙突が倒れるのだ！
少年は明るい腦貧血を感じる
瞼を點滅させると　現實の空は
青鳥眞よりも青く　シーンとひそまり返つて
天への舗道が
嘘の様にきわやかに伸びてゐた

ある午後の散策

西本輝子

街は傳染病患者のやうだ　強い消毒藥をまき散らす　それにむらがる蠅のざわめき　私はマスクをかけて通らふ　トーク帽の女がやつて來る　網にひつかゝつた魚のやうに　巨大な掌からビラを風にリレーする　穢らはしい物のやうに　私はそれを受取り一字一字をよむ　そしてきれいにたたんでふところにしまふ　交叉點は街の羅針盤　街の呼吸を司る　そして都會人よ　こゝでだけお前は童子となる　ふとポスト　まるで此の世の事にかゝわりのないやうに　私は昨日書いた手紙を思ひ出し　菓子屋へ入つて切手を買ふ　かぶさつて來た夏のやうな濃綠の切手は，手紙のやうな味がする　私は手紙を落す　私は私を落す　そして私は郊外電車に乘り窓を開けやう　外は一面青田だ　空からミルク色の雲がこぼれる　私はそれをなめやう

三色菫

上田康

雲には貝殼が繁殖してゐた
貝殼は星となり
深更
天上を見捨て
下界に降り
三色菫と化身した

愛戀

夜氣にひらく　愛の葩を挽り挽つて胸に飾り　飽き足らず　花瓣も花蘂も啖み　反芻し　蒼き泪ながす
は　いつの日のくりかへしか
愛の葩よ　男情の我儘を　愛情とて　恕し　希ひ
索め　慕ふすべの哀れさを　哀れとぞ思はず　誇り
莞爾し　生活とするは　愛しく　絆たつる日を　懼
るるは　葩の美しき故に非ず　官能の歡び故に非ず
滾々と盡きざる　淨き愛の泉に　わが心　映ゆる故
なり

わたしには何にもない

豊田春江

はだかになると、重いものもなく、それ以上に背をむけるものもなく、すべてがはがねのつよさになり、いまは見られまいとするたゞひとつのものもなくて、からだのどこからでも、湧きあがるじぶんだけのやくどうをずきずき感じる、それは妖しい燐が內臟をもやしてゆく骨をやく疼きであらうか、からだ全體が、何か燃えあがりさうな、その時、その時で、ばくはつしてしまひさうな、まるで灰の中に埋められた火藥のやうに、それはこの上なく、あぶないものになるのだ　いまゝでのいつさいをもやしつくして、もう本當に惣だけが、どうにもならぬ惣だけが、それでも尙どろどろともえやうとしてゐるからだ、しかも、それがもた盡してしまへば、やきつく沙に吸はれる一滴の水よりもはかなく、消え去つてしまふのに　まだもえやうとしてゐるのだ、もえ盡さうとしてゐるのだ、いつたいからだのどこからもえ出すであらうか、目の玉からか、唇からか、からだ全體が、一時にであらうか、からだのすみずみに流れるくれなゐの血は、あかあかと後かたもなくもえ切れるであらうか、骨のずゐにたまる水まで見

事に、くすぶらずに、それはもえ切つてしまふであらうか、わたしのぶ厚なあばら骨の中には、きたないものきれいなもの、いまは何もない、わたしのもつべきもの、わたしの考へるべきもの、わたしは一切いらない、わたしには何にもない、たゞあなたのほのぼのと、あたゝかなあいじようのほのほがあるだけだ

海圖

明智康

杏クニドンヨリト蒼ズンダ海ガ見エル
白イビルノ屋上デアル

風ノヤウニボクハ屋上ノ稜線ニ沿ツテ
歩イテイタ
旗達ハMILKヲ流レタ雲ヘ
サカンニ秋波ヲ送ツテイタ
誰レモ知ラナイコノ幾何學上ノ一線デ
ボクハ少女ノクレタ chart. ノ
ブランクニ赤イエンピツノ
マークヲツケル

イクツモ〳〵
キイタ事モナイ地名ノ上ニ——

ヤガテボクハソンナ事ニアキルト
白イ腕ノ少女ト一緒ニ
サボテンノ葩ノ下デ忘レタ筈ノ
BEE 玉ヲ探スノダツタ

朝

膨脹するオゾンの中で
ぼくの檢溫器が羞恥に頰をそめる

蝶々の配達夫が白い花粉を明るく
まきながら
アーチの門をくぐるとき
ラスの椅子は
新鮮な朝刊のインキの香に
ふと、惱しい情感を感じる

(イナカノアサハボクヲエーテルニシマス)
あ
しびれる樣な腦髓に
薊の花をつけた檢溫器が
一散に昇天する

少女と夕景

中村大

冷たいたうきの破片と貝の
ひつきりなく潮みづに流るる時間。
光は戀ふた
みかへりがちに
棧橋の上の頑な少女を。
ああ鷗の拋物線は影の向うに墜ち——幽かな韻を含んで漂ふてくるもの……。

空はひとしきり明るく
港はさつと暗くなつた……
——それは哀しい靄の氣節
——それは鄕愁の奥津城の挽歌
(どこかに凝固した魚族が潜んでゐる)
羞みながら少女は
ひたひた耳朶に忍んでくる ノスタルジアを唇に感じまいと泪ぐんでゐるのに違ひない。

生活

美川悧

私は兄貴の骨を嚙みながら
きんいろの微風の中に遺稿の斷片を開く
かり〳〵と響く齒莖に斷腸の譜が軋む

朝——
くろがねの突風が
鋼鐵の肌を席卷する時
ぐら〳〵とバランスを失つた薄い影が虛空をつかみ
むしばんだ背骨に眞赤なばらの花が咲く
私は生活の總てを托して散つた兄貴に
貧しい花輪を送ろう

あふむけの空は限りなく蒼いが
五月の微風に私の背髓はぎく〳〵と痛む

メランコリーの一刻
メンデルの法則が浮んだ時
詩集の一頁が、かすかにゆれる
明日も又背骨を抉るバイトの先に
こゝろよく生活の呻きをきこうか

逝く青春

宮川蜻兒

流れる綠の明るい明るい光、その縞目が仄かにぼ
やけて擴がる涯、かぶと虫の觸角が青銅の置物のや
うにものうく止まる、と、黑いくさび型の鎧扉が心
の何處かで、くつきりと枠をつくる、鳩が啼く、白
い野鳩が、すいかづらの蔓につゝまれて、晝寢のや
うな白亞の部室、狐顏のぼやけた、ローランサンの
青い乙女らは額の中で、桃色のドレスの縮んだ影に
嫁ぐ日の迫る物思ひのやうに、蝶の胡粉を吹く、淡
い青春の頁をくりひろげながら
とほのく音よ、しのびよる音よ
明るい別れの歌を結びあはせよ

病床記

山口眞佐子

釣花瓶にうなだれたコスモスの落す黃色い泪に　私
の絕望の歌はかなしく高調して、青い色がみを四角
に切つて張りつけられた窓邊にすゝりなく
呼べども叫べども蒼白く細つた十指の間から拔け落
ちた健康の玉は、光失つてカラ〳〵と腐りはてた底
知れぬ胸底に轉んでゆく、その佗しい音を、私の魂
は躊躇きながらも未練深く追ひかける、點々と濡れ
た足跡を殘して……眞白いシーツに流れる黑髮に貝
となつて沈む二つの瞳から——
明日も明後日もない今日の續く心だが、弱りはてた
肉體の日記は一枚々々めくられ、所々に嘗つて私を
美しく引きたてゝくれた衣裳の樣な鮮明な血潮がす
はれ、やがて結ばれるであらう黑リボンの理由をあ
はれにも華かなものにしようとしてゐる私の細つた
指は、その部厚い日記帳をさすりながら日日とと
に愈々細つてゆく

春雨

桂美津夫

ひとゝきひとゝきを
ぴちやぴちやと反芻する

まつくろいけものは
呼吸をころして
軒下にしのんでくる。
山の幸を薫じて
世紀の物語りは
とろとろと
舐められる大鍋をとりまいて
濃やかに湯氣をたて
三つの木彫人形の
頬照つた網膜は重く
そーつと訪れた
屋外の息吹きに
腦髄をしつとり汗ばますのだつた。

桃色の霧

安部英雄

——To Miss UTako——

ヌクヌクと　野兎ほどの體溫を　地べたに感じる。
耳を澄ませばゴトンゴトンと、心臓のきこえさうだ
そんな仕草をする僕の背後で、陰影の濃い少女が笑
つてる　少女の體から　桃色の霧が流れてくる
（野邊）

青空の　あのくものひとかけ　だつたのかもしれな
い　二人の掌で　踊るように光るキ　リコガラス
（春　光）

少女に贈りたい　古代更紗模様の　ネツカチーフの
事や　春風に乘つて泳ぐ　金魚の事など、みどりの
風は　輕やかに　ささやいてゆく
（南　風）

いつから　そんな魔法を覺えたのだらう　白い蛇の
感觸に溺れ　目をつむると　體中をつつむ　桃色の
霧　まろやかな少女の胸から　金屬性の　ああ　春
の笑ひ聲だ。
（桃色の霧）

高原の歌

安井正三

青春ノ
南ノ風ガ吹イテイル
南カラノ風ガ吹イテイテモ
高原ニ來テ
高原モ淋シイ
誰モ居ナイ
タンポポ
スミレナド
咲イテイル

種子ガ運バレル
運バレ行ク種子ハ
何處ノ何ンナ
谷間ニ降リルコトダラウ
何處ノ何ンナ
道端ニ再ビ芽生ヘスルコトダラウ
シヅマツテイル
サカンナル火ヲ炬キナガラ
高原ハ孤獨ニシズマツテイル

友情の炎化

福島源次郎

——亨　二　君　と　僕——

まはりは炎を消さうとする水ばかりの群だ
——とある扉を無斷で開いて遁入した
靜かな經濟學徒にカムフラージュされた彼自身も知
らない燃えてゐる彼の音を聞いたからだ
そこは非常に住み心地の良い所であつた
僕を燃やすだけ燃え昇らしてくれた

その高熱は彼と彼とを熔解した
彼は囁いた「僕にも歌心があつたのだね」とその時
急に彼の炎は勢よく燃え上つた
僕の炎と美しくとけあひながら……。

或る時

その丘から吹き下す風は砂塵を捲きあげ
煙つた風景も、もう眼には這入らない
深海の底を歩いてゐるやうな壓迫、冷たさ
小魚に盛んに顔を小突かれて
もまれもまれ——。
いつか、スペクタル映畫「スエズ」の旋風の畫面の
アフリカ沙漠を歩いてゐた
おや、梅の香りがする、あゝ、この嵐の中にも日本
の美しい清らかさが存在してゐた

詩と創作・關西の權威誌

作家街

第二年・第五號・内容

第一歩……山本重敎
或る現實……櫻井增雄
獨房の心……寺元亮子
立體圖……雄島立三
早春……吉田欣一
ライン犬山……西田五男
春……後藤敏夫
柳のある舗道……眞木利
地衣帶を讀む……梶浦正之
作家の精神について……八幡理一

大阪市港區九條通三ノ五三九
作家街發行所

第五輯の反響

今輯の編輯樣式は特に多くのエッセイを含み誠に堂々たるもの、同時に編輯の苦勞も大變であつたらうと思ひます。梶浦氏の扇面張合屏風は特に素晴しい詩で、僭越ですが私自身の好みでは從來拜見したものゝ中で最も好ましいものゝ一つでした。（岩谷健司）この困難な折に、よく紙質等も落さず發刊されることゝ見る程の者は感嘆致してゐります、並ならぬ御努力の程がうかがへて頭の下る思ひです（寺元亮子）本輯は「ボウドレイルの横顔」特輯で、詩抄や評論など、ボウドレイルの思想、人となりなど大變感銘深く存じました。同人の方も數多く作品としても秀れたものが澤山あります。山路氏の「說」竹内氏の「われよる空に描きしは」鹽谷氏の「入江雅歌」など忘れ難い作品です。梶浦氏の「扇面張合屏風」は「情熱」「母の面輪」「袂別」「味覺の妹」それぞれに梶浦氏の特異な詩情があふれてゐますが中でも「母の面輪」は私のもつとも愛誦した作品でありました。松葉が雪の輪を受けてゐるところや母を呼ぶあたり、繰り返し拜讀して愈々詩の深さうままさに惹き入れられます（高木秀吉）早速開卷、まづボウドレイルの多角形的プロフイルを非常にうれしく讀み勉强になりました。詩作品では「扇面張合屏風」が斷然もので「情熱」と「母の面輪」は何度讀み返したかわかりません。味のある詩の必要は絶對だと思ひました。木下氏の早春の歌は相變らず良い氣持で讀みました、さてあらためて、また誌を見つめてゐると隨分と良い本だなあとまた歎息が洩れます（木村茂雄）諸氏の健筆振りに一驚し又驚いてばかりもいられませぬので一生懸命に勉强してゐます。ボウドレイル特輯、巨人のあらゆる角度からの視野に嬉しく再び感じ入つてゐる次第、木村氏の「雪便り」鹽谷氏の「入江の雅歌」清水氏の「透明なMUSIC」長谷雄氏の詩二篇大いに味讀致しました。堀口氏の「風の樣に」等終節にてすつかり形を成してゐる事に驚き見直すと全部にわたつてきつしりしめてゐる作、會友欄の諸氏の作も逞しい若さをひしひしと感じます。この誌から親しく諸氏を知りたいと思ひます、作品の評消息等多く載せて下さいませんか（辻井健彦）「訣別」俳人の顔が見られました。こうした涼しい見方もある。俳句の持つポエジイが最も純な狹雜物の少いものぢあないか等と考へました。コロイド→リキュール→アトモスフエア。さあれ、まだまだ僕の世界ぢあない。粘質をこねてこねて、それから息がつけるでせう。梶浦氏の「中央公論」四月の詩「蛇穴を出づ」も拜見。シルレルなるものと思ひました。勁い呼吸を思ひました。美しく、すがしく、フオルマリスムに見られるフイクションに依る破碇の繃縫なども見當らず動かし難い大家の風格を感じました。自分等は未だペーソスの獨り歩きにて絶へず理性の批判を加へねばならぬと感じました。馳け出しの及ぶ所でない事と知りました（堀口太平）この度の表紙に見る青色と梶浦氏の作品との美しい調

和、小生の好みからそれが一番に強い印象でした。池上ひさ子さん、この詩人はよい女流です、その他そちらの方々の作を見て御指導の良さをしみじみと思ひました。たゞ諸氏の中には謂ふ所の新しさ、然も假りものゝそれのみせふりかざしてゐるものもあつて幾分氣になりますが全體としては矢張一流誌の名に恥ぢぬものでその立派さは近ごろ他に見られぬものでありませう。（山路青佳）第五輯、一輯毎に充實躍進の感あるは誠に御同慶の至です。私の「或る晴れた春の日の午後」中灰色の突レンズは灰色の凸レンズの誤りにつき左樣御訂正下さい（岩谷健司）梶浦先生の「味覺の妹」なんて素敵なのでせう、先生ならでは感を深く感じました（羽子田時世）第五輯は特にボウドレイルの横顔に依つて詩壇に新問題を課したやうです。慾望ながら梶浦氏のエッセイのないのが遺憾でした。春山行夫を訂補し、萩原朔太郎に叱正する人は現詩壇に於て梶浦氏以外にもとめられないやうです。（小池亮夫）いづれも示唆に富む論文など編輯の勞苦もいまさらながら併せ思ひ感謝に耐へない次第、小生の未熟の到すところ、練金された詩句などにたまたまぶつかると、それらが無意識の内に自己の作品に再生する事があり、それが現在の自分にとつて最も警戒を要する點だと思つてゐます。（竹岡範緒）詩文第五輯落手、何のなぐさめもないぼくたちの周圍に向つてゐるザボンの花にも似た香り、壁に雨漏のシミのある支那家屋の一室で今夜は大變そはそはしてゐます。梶浦氏の譯文の流麗なのに敬服、どういふものか梶浦氏の「寂しい時は」といふ詩を想ひ出します「花を蕊ごと喰べて了へ。」新人入會多い樣子、發展を祈ります。本輯のやうな研究はこれからも續けて行はるべきだと思ひました（大陸出征陣中、小松茂彦）

作品再檢討

「詩文學研究」第一輯より第五輯に到る全作品中世評を博したものを左に掲げる。○印◎印は特に好評を得たる作品。何等かの參考となれば幸甚。作品の批評讀後感を揮つて御寄稿あらむことを切望します。

第一輯作品

◎荒天四篇（梶浦正之）○聖書、海鳥（津瀨準）海底の氷塊（桑原貞子）山峽（川平洋一）◎雹の降る家（木下夕爾）水の夕（城田英子）鶴（石川平愛）○朝の歌（小林正純）朝（藤原吟情）

第二輯作品

◎驟雨通過（木下夕爾）◎蜩の家（最上八平）◎東洋（萱原信之介）◎秋近く（奈良進）鳩と永遠（浦瀨白雨）作品（安田吾朗）○石器の街（津瀨準）○茶筵（梶浦正之）○翌朝（熾木由美）風邪色（長谷雄京二）流れ（小松茂彦）鬼鈴の鳴る夜（鎌田安雄）

第三輯作品

◎肉體出發（竹内一）○春への組曲（川口敏男）丘（柴俊介）聖夜（葛井和雄）白日三題（渡邊曉彦）○都會のデッサン（木下夕爾）◎青嵐（梶浦正之）血緣、○夜の坂（川越勤）砂丘の詩（嶺皎彦）北壁（佐藤菁雅）白い手の祭（藤浪里子）

第四輯作品

臙脂の焰、◎出發（丹羽哲夫）○青銅の夏（木下夕爾）○航海清水達）○初夏（奈良進）眞盛の夏の夜（小池亮夫）○夕顏抄（渡邊和郎）新居記（挽地英夫）◎詩信（小松茂彦）花を拒否する圖（木村茂雄）◎巨女の目覺め、○綠蔭（梶浦正之）○蒙古（水島秋夫）憩ひのうた（嶺皎彦）裏街の黃昏（小林節子）未亡人の會話（上松ちか子）支那兵の骸（小山達也）ある刻（野田久子）うらない（池上ひさ子）

第五輯作品

○說、◎逮夜の夜（山路青佳）○われよる空に描きしは（竹内一）透明なMUSIC（清水達）○訣別（桑門つた子）○入江の雅歌（鹽谷安郎）◎扇面張合屏風（梶浦正之）○ぶどういろのうた（長谷川霧子）◎孔（伊野亨二）◎夜の翼（松村一美）風の樣に（堀口太平）光り合ふいのち（國廣勝太郎）或る風景（西山五百枝）○港（小林節子）斷章（森下舜一郎）銅像（岡田武雄）○藤房の垂るゝ頃（藤浪里子）○白い處女（池上ひさ子）美しい情熱（大橋正種）歸鄕（辻井健彦）○春を俟つ（秋葉みさこ）疲睡（國分尙治）雨の夜（稻垣美子）○帶止（西本輝子）ナガメ（桂美津夫）

◉注意◉

○入會希望者は作品に返信料を添へ會則を請求されたし
○本會發刊の詩書及詩誌見本希望者は返信料を添へ申込
次第詳細通知す
○寄贈されたる新刊詩書並に詩誌の批評紹介をなし、時に優秀なるものは取次の需めに應ず
○次輯原稿會費締切九月十日

右の通信はすべて左記編纂者宛の事

愛知縣佐織町勝幡二六三〇　梶浦正之

振替口座名古屋二四八三五

試作欄

指標

加藤俊吉

私は暗い街に漸く疲勞を覺えて
ガード下に雨をしのいで巣喰ふ賤びた裏街を軒並傳ひに
重い脚を運んでゆく。
夜眼にも明らかな古りて汚れた住居だ、
襤褸をまとうた一人の醜い老人が、脊中を丸くして、ガ
ードの下を通り過ぎる。
さりげなく私が去らうとすると
けたゝましくベルが反響した——
ガードの鐵板に、レールに、コンクリートに、アスフア
ルトに。
ゴーストップの信號燈が眞赤な眼光で私の歩行をピタリ
と止めた、
ひとつの流への無氣味な指標！
流線型の高級自動車が身輕にぬつと現はれ私に近づく、
私は周章てゝアスフアルトの上を鋪道に身を避ける
危機は、何處にも待ち伏せし、私を怯やかす。

園

加藤沙だ子

貪婪な蜜蜂の旋回の下で
鋭く　はぢける花の彩
（小動脈の噴走）
ぶだういろの脊を曝し
白い泡土を攀る蟻ども
さわさわと　うまごやし湧き
ひそかにも生命蠢く

一頁

ヒュン　ヒュンとまだ春は鋭いが
あゝ　掌の上にしたたる陽

現實

伊藤聖子

すみれいろの暗に沈む墳墓の丘に

なまなましい墓標をめぐり
風に瓦解る骸骨の
白々しい亂舞のどよめき
あ、あ、あれは私達の愛のむくろ、愛の骸だ
きのふまで
歡喜に熱くふるへた
唇が手が胸が
あれ、あのように青く冷え果て
闇のなかに嘲笑つてゐる
荒々しい現實に瞳孔はきりひらかれて
ガタガタに崩れる
幸のひとつひとつを
みつめねばならない土靈の
鴉よ　眸を啄め
鴉よ　眸を啄め

山河と戀愛

田中律

何時かチュブの中の黄色は誰かの手でおし出されて居る
筆を取つた私はベタベタと卒業寫眞に粘りつけた
秋の野に泣く蚯蚓のやうに
互に掌にかくれて歌ひ續ける
夜毎の月の上る度にSなる詩人は桃色の戀だと言ふ
やさしい貴女のかたを鉢木のとけ葉でついて居るやうに
私は何も知らない峠道を歩むのか？
私のポエムを讀んで彼は山へ山へと水が流れると言ふ　だ
から貴女に水で面を洗ふ事はおやめなさいと言つたら　水
の中を見て天然痘の菌は居りませんと楕圓形にかき廻す、
上げた手には小さな貝殼がくついて居る
其の時貴女は私の机の上でむすんだ口元のやうにやさし
いひとみが其れを見つめるのです
私は川の流れるまゝに歩を運んで歩くのです

山巓

小松信彦

盛り上る巨大なうねり

絶えず雲は湧き流れ疾り
渦を卷いて飛翔する薄墨の雪の炎

何といふ遲ましさだらう

太陽は紙の如く或は白金の如く
うすれ又輝き
大空はあくまでも碧く深く

白樺の彫像に樹氷煌き
華麗に雪は匂ふ

眼下にしづまるは黝い冬の山々
茫々の世界漂渺の色

あゝ白銀の光狂ふ
山巓よ
生よ

春の胎生

兒玉弘子

やさしい人の掌のやうに南風が訪れると
土手の柳の薄い芽が
通りぬける妓生の白衣に模様を描く

なごやかな晝過の歩みは
花街に島田、素足の藝者と行きかひ
流れる三絃の音に纏る湯歸らしい香

やがて裸木並ぶ丘、白亞の館に
四角な金の瞳が夥しく生れる頃
うつゝなくも落した栞を拾ひもせず
じつと生れ迫る春を空想ふ妾

早春抄

不二柳子

萌黄色の階段を登つて行く

若い心たちよ
……黄昏もない、夜もない、季節の階段……

紅潮した頰に一杯の笑を湛えて
抱き切れない愛情をやつと押えてゐるので
靜かな奔流の樣に波打つてゐる心臟

「嬉しいんだね」しみじみと……
若いあどけない　生命たちよ、

そんな中で
何時しか同じ階段を登つてゐる私の影は、
たゞ一粒の氣粒でしかない。
ほのぼのと
ほのぼのと
私は早春の氣粒である。

早天

鈴置勝利

どこかで
ギヤマンのわれるやうな音がすると
マグネシウムを燃やしたやうな光が虚空に閃く
ほうろくで煎つつたやうなパサパサの空氣が胸を出入りする度、頭へ
枯葦のすれ合ふやうな響がする
季節を失つた蝶が翅のほころびも其のまゝに炎天下にはゞたいてゐたが
急に腦貧血をおこし麥の根に倒れた
哀れ――あはれ、そのまゝ飛び上る精もなく遂に體からはほのぼがあがりだした

いつかの日胸にあつた
忘れられてゐたこんな日――

音符の夢を追つて

岡田篤也

白いベットの唄ごえは
追つても追つても思ひ出せない
想ひ出の樂譜帳の頁をくつて見ると

ビオラの音が病院の階段を靜かにやつてくる
霜むだ山脈がフイデイオの序曲のやうに現はれたと思ふと
激しくタクトの波に碎ける無數のカモメ達は白い波間にロンドを踊る
それは何時頃か消え失せに病葉のきをく
私は眞夏のリズムの流れに醉ひ疲れ
透明なインクで綴られた音譜の一節一節をじつと見つめて居る
私の魂に觸れるものがある
去年の記憶がしのび寄つて

聖夜

榊原鈔

私が汗ばんだよれよれのシャツをぬぎ捨てると薄暗い部室に私の體臭がむうつと漂ふ 疲れたからだを藤椅子に投げだすと 微風は私の涙を誘ふて古ぼけた日誌に小犬の様にたわむれるのです
摩り切れた疊に 洋燈は乞食の様にやせた冷い光を注いで 私の木伊乃を畫いた 蒼白く寞れた私の姿……
窓際の楓がさゝやいた「カルピスの様な息吹ですね」と
冴えた月の光はやさしく睡魔となつて私を慰めてくれる 私はほたるの光のまたゝく間に見えない透明な翼に覆はれて行くのであつた

北海道唯一の詩誌
北方詩族
第十四號內容
ジョンソンの言葉……岩田一男
變色・南國……梶浦正之
月ハ意識ノ上ニ照ル……木村茂雄
國際河川……宮本康三
囈言……鹿野壽太郎
存在……野呂喬
その他エッセイ詩篇等
函館市時任町三
北方詩族社

編輯後記

本輯が公刊される頃は恐らく炎暑も峠となつてゐるであらう。本輯は上等印刷紙入手困難のため竟に紙質を落したこのために本誌の單行本體裁は多少解消されるかも知れない。想へば、本誌は發刊と同時に戰時局に入つて經濟と物資との苦難を此處迄續刊し得たのは不思議な程である。會費も變へず數冊配本の特典もそのまゝに續け得たことなど……仲間諸氏の支援の賜と思ふ。

本誌は一切の責任を小生負つて何處迄も續刊することを更に固く約束する。毎輯、仲間諸氏の作品を揃へるため遲刊をまぬがれないので、此後はたとひ少人數でも早く刊行してゆく豫定である。會費も未納の方は早く納めて頂きたいし、此後は作品と同時に納入して頂きたいと思ふ。

私事に渉つて恐縮であるが、小生四月中旬岐阜東濃方面下旬から五月上旬へかけて北陸、飛騨方面へ、石川、福井更に、高山市へ亦、七月中旬大阪方面へ赴き、各地の詩友諸氏に多大の歡待を受けた事を多忙のため御禮漏もあつたので此處で厚く感謝する次第である。

諸氏の自愛と健筆を祈る。（梶浦正之）

昭和十五年八月十三日 印刷
昭和十五年八月二十日 發行
第六輯
定價五拾錢
編纂者 詩文學研究會
發行兼印刷者 東京市麻布區霞町一番地 堀口太平
詩文學研究 第六輯
印刷所 詩文學研究印刷部 東京市麻布區霞町一番地
發行所 詩文學研究會 東京市神田區神保町 上田屋書店
發賣所 東京堂 東海堂 北隆館 大東館
大賣捌所

梶浦正之詩集　青嵐　最豪華版　殘部僅少　定價二圓　送料十四錢

木下夕爾詩集　田舍の食卓　絶版　文藝汎論第六回詩集賞獲得

西山五百枝詩集　海洋底質　四六判　全アート　定價壹圓參拾錢　送料拾錢

木村茂雄詩集　奇妙な街　菊判上製　好評嘖々　定價壹圓四拾五錢　送料拾錢

國廣勝太郎詩集　天使の饗宴　絶版近し　定價六拾錢　送料六錢

越智彈政　岡田武雄　合詩集　八幡大菩薩　四六版厚表紙　殘部僅少　定價壹圓五拾錢　送料拾錢

丹羽哲夫詩集　綠の假睡　新菊半截　アート紙美本　定價壹圓　送料六錢

清水達詩集　航海　新菊判　布裝幀　定價壹圓八拾錢　送料拾錢

鹽谷安郎詩集　招待狀　殘部僅少　定價五拾錢　送料六拾錢

詩文學研究　第一輯　第五輯　定價八拾錢　第二輯・第三輯　定價六拾錢　第四輯　七拾錢

發行・取次　詩文學研究會　東京市麻布區霞町壹番地

梶浦正之著

詩の原理と實驗

★未だ嘗てなき現代詩の生きた新教科！

特長（評家・讀者の讀後感を綜合して）

1 **明確なる理論の體系組織**
單に詩の局部門の研究を集成したるエッセイ集に非ず。如何にして讀者に詩の本體を認識せしめんかに最大の目的を注ぎ組織的に書き下したるもの。

2 **實證實驗を基調とせること**
所謂理論のための理論に墮せず。一言一句すべて科學的乃至心理學的實證實驗を伴つて書かれ、現代の詩歌人が今日直ちに詩作に活用出來得るもの。

3 **文獻の廣汎且つ正確なること**
引用言辭の出典を一つ一つ懇切に註釋し、所謂學者的良心を以てせるもの。

4 **論旨の簡單明瞭にして約要を得たること**
尨大なる頁を要する文獻にあらざれば到底之を顯し得ざる論旨を極めて巧妙に約要したるものなるが故に初學者と雖も容易に其の論旨を把握するを得る。

★本書の眞價は何よりも先づ讀者の聲に！

四六判厚表紙・特別箱入美本・定價壹圓參拾錢・送料拾錢

詩文學研究會刊

東京市麻布區霞町壹番地

後藤敏夫詩集

紀念寫眞

序文　梶浦正之　跋文　八幡理一

四六判内容グラビヤ二枚折・寫眞四葉・箱入美本
定價　二　圓　送料　十　錢　・限定版　・番號入

新興詩界に、眞摯な性格と不斷の努力と豊饒な詩才と、尙その上に謙讓な精神を有する新人が幾人あるであらうか。著者は世の多くの詩人に觀る如き、小手先器用や或は對象を概念的角度に於て把握する傾向に屬することなく、對象そのものを再現する處に主觀的色調を與へんとする、即ち身を以て對象に肉迫する態度、肉體的本質に於て之を捕捉する才能に其の特異性を遺憾なく發揮せる新人である。「何も分らないでもとにかく眞直ぐ生きてゆけばよい。私には過去もなく現在もなく、また未來もあるとは思へない。私の一生を通じてあらせたいのは唯一つ人間であるといふことだけだ」（後記）この透徹と謙讓の精神に生誕した好著！

發行所　大阪市港區九條通三丁目五二〇
小福堂書店

寺元亮子詩集

地衣帶

四六判折表紙・内容百五拾頁
定價壹圓參拾錢・送料拾四錢

内面的な精神の動向と外面的な現象の變遷とを相互に關聯させたものが所謂生活記錄といふ言葉で顯されたとすれば、この一卷は强靱な一女性の半生を貫く凄慘な一大叙事詩を讀むの想がする。それ程に此處に納められた各詩篇は相互に物語的な有機的關聯を保つて壓し迫つて來るのである。

何よりも先づ、この作者が齡若くして人間的な多くの體驗を經て來たといふ事が、幸か不幸かは問ふべきではない、唯、それらの體驗をして價値あらしめるためには、人間的な根據を深い糧とし、起伏ある精神の越し方の波を翼として新しい現實を迎へる不斷の力への飛躍であらう。この逞しい精神の强靱性、この豊饒な體驗の蓄積……（梶浦正之）

發行所　大阪市港區九條通三丁目五三九
作家街發行所

詩文學研究　第五輯

ボウドレイル研究號

菊判・極上印刷紙・百十餘頁・單行本形式・美本
寫眞版入・定價八拾錢・送六錢・殘部僅少

主要内容（エッセイ）

ボウドレイル詩抄……梶浦正之譯
ボウドレイルと浪漫派……ポウル・ヴアレリイ
ボウドレイルの繪畫觀……エミイル・ベルナアル
憐愍と苦痛との奢侈……ツルクエ・ミルヌ
ボウドレイルの自己評價……アンドレ・ジツド
ボウドレイル肖像畫……ガスタアブ・クルペ
その他八十餘名、詩壇新鋭の作品、エッセイ「空に結ぶリボン」（川口敏男）「文學以前の諸問題」（鹽野保男）「神話の詩人」（小田邦雄）「詩の原理と實驗」について（濱名與志春）ブック・レビュウ等數多

「詩文學研究」は毎輯單行本形式・海外諸國の新智識を動員す。何よりも實物を求めてその眞價を知られよ。第一輯より各輯取揃あり。但し、第二輯品切。

待望の代表作品集出づ！

梶浦正之詩抄

最新刊

夙に定評ある著者の足跡を辿る者は、其處に大正昭和の二代に渉る日本詩の本格的潮流を識ると偕に重疊たる山嶽を乘り越へ來れる不斷精進の著者が毅然たる詩魂の雄姿を望むを得ん。

本書は著者過去廿年間の作中より撰出せる詩品、こは既に名聲世に昂かりしもののみにして原本の大半は絶版、識者の喝望久しき書たり、古典・象徴・新現實、更に最近作の各傾向より抒情小曲の珠玉に到るまで凝つて一卷百十餘篇の樣態（ジャンル）の絢爛、以てよく鬼才の全貌を覗ふに足るを信ず。

四六判・全アート二百餘頁・本製本・箱入
著者肖像入・極美本・少數刊行・價二圓送十四錢

刊行所　詩文學研究會　東京市麻布區霞町一番地

Étude
de la Poésie
No. 6

詩學研究第六輯

50 sem